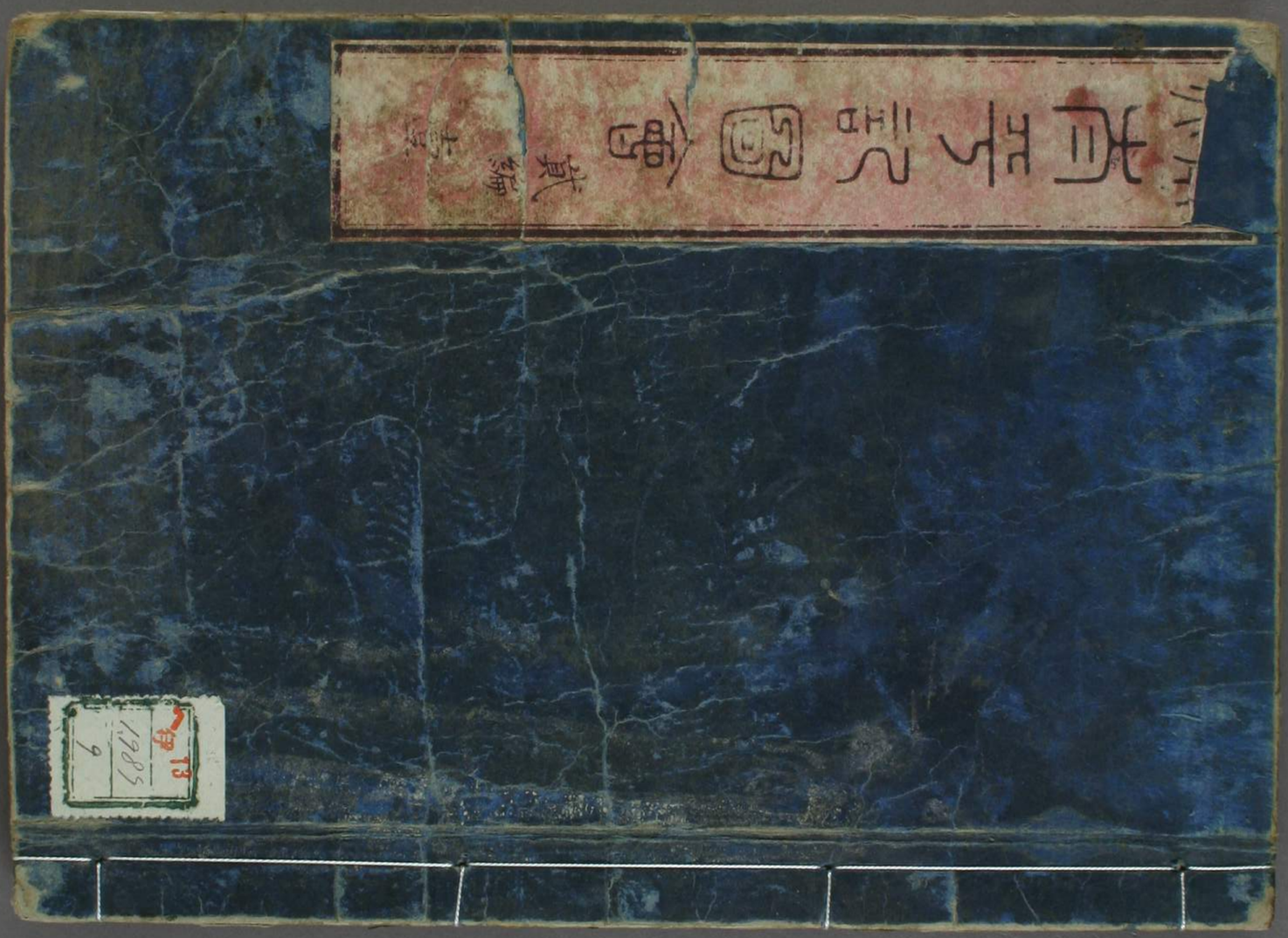


門へ 18
號 1989

京都帝國大學圖書之印
常盤本藏

治亂興衰世の推
移天下陽明の
ちうれふ事
の元弘年中なり
忠臣義士れ出の為

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

大八洲豊千里和芳

神代より[illegible]

[illegible]

[illegible]

世乃光と[illegible]

の[illegible]

[illegible]

同年論白世長人中書令
長人中書令白世長
[illegible]

萬里小路從二位中納言正房卿

藤原定人書

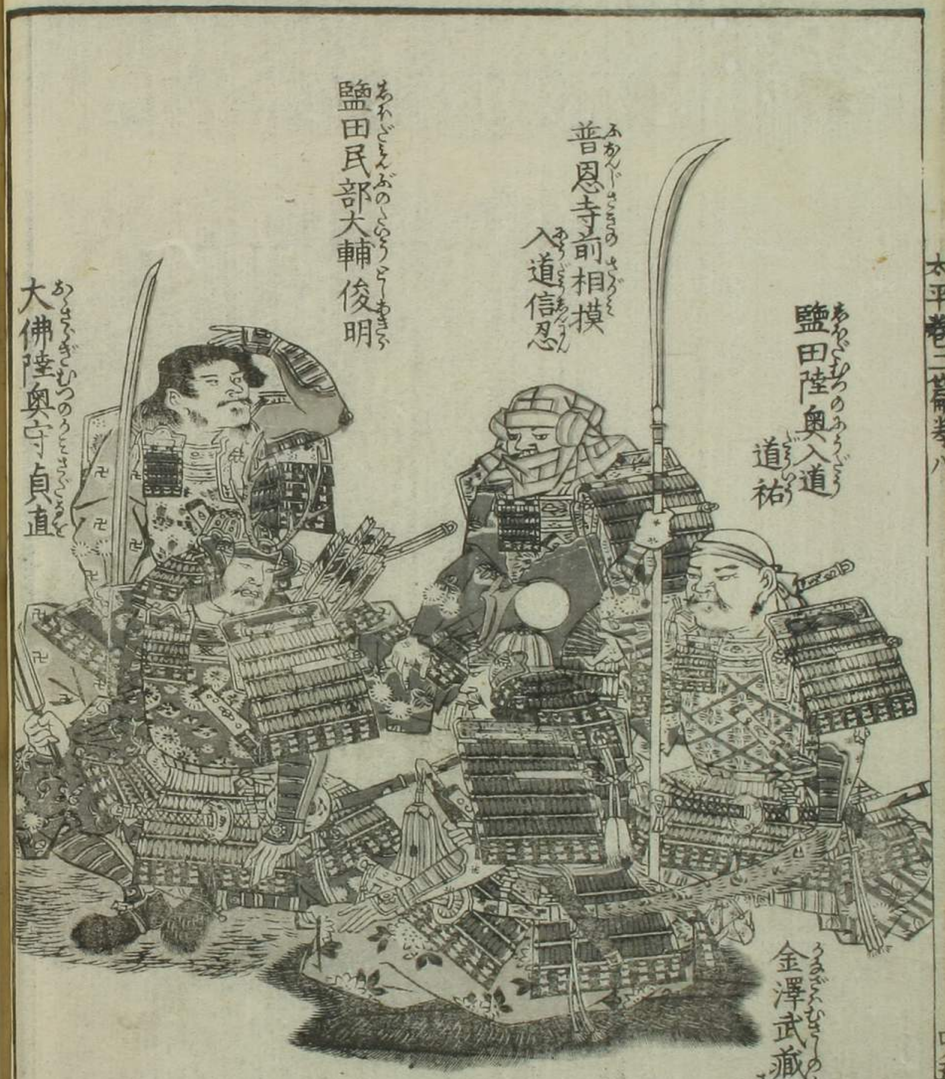
浴中羅漢
龍戰曾經八瀑歌
巢窮審弋特奔跂
當四海鈴餘筆自寫子
承萬象步者
司顯步驢類老生　聖山書鑑圖

等持院贈太政大臣源尊氏公

清和天皇十五代足利讃岐守貞氏の
二男なり元弘の乱ふ両六波羅を攻破て
北條の余黨を討て自ら
征夷大将軍と稱しあり
義貞正成顕家等と
戰ひ敗走をとつゝも
時運ゝかゝわひ
持明院上皇の院宣を乞請
伏見院皇子豊仁親王を
帝位ふ即奉りて累世幕府を開く

足利左兵衛督源直義朝臣

足利貞氏の三男尊氏の舎弟なり
性佞暴奸智ありて尊氏を助て恣ふ
權威を震ひ左兵衛督ふ任ぜらる
薙髪して恵源と号し悪逆積て
兄尊氏と牟楯をなし戰ひ
負て降参を威衰て
終ふ毒害せらる


鹽田陸奥入道
道祐
普恩寺前相摸
入道信忍
鹽田民部大輔俊明
大佛陸奥守貞直
金澤武藏守
貞直

鹽田新左近入道聖遠
安東左衛門入道
聖秀
長崎三郎左衛門
入道恩元
鹽飽三良左衛門
忠頼
長崎三良左ヱ門
為基
赤橋武藏守成時

長崎新左衛門高光

長崎次郎高重

嶋津安藝前司
氏久

陶山備中守
義高
河野對馬守通治

新田十六黨

堀口三郎貞満
大館次郎宗氏
大館孫次郎行義
羽川越中守時房
大井田遠江守経隆
田中大膳亮氏正
鳥山左京亮氏頼
里見修理亮義益
大嶋讃岐守盛之

里見五郎義俱
山名次郎忠家
山名彦次郎氏兼
山名弥次郎氏明
岩松三郎経家
桃井次郎尚義
江田四郎行義
武田五郎信義
江田三郎光義

互理新左衛門逸勝
篠塚伊賀守重廣
畑六郎左衛門時能
栗生左衛門忠良

長濱九郎左衛門
由良新左衛門光氏
名張八郎
船田入道善昌

菊地肥後三郎
武春
菊地肥後守
武重
菊地肥後
入道寂阿

結城九郎左衛門尉親光
三浦平六左衛門尉義勝

赤松信濃守範資

赤松筑前守貞範

再出

同三男律師則祐

妻鹿孫三郎長宗

出像 五十三傑 岩瀬廣隆筆

本館藏書

南北太平記圖會貳篇

總目録

卷之八

時信時知発向播州
圓心再度戰京勢
圓心追北逼六波羅
則祐前騎渡大井川
河野陶山破赤松兵
圓心二責六波羅
禁裏仙洞被行御修法
則祐遮半途走京勢

山門應牒叛六波羅
豪鑒豪仙悪戰死義
圓心三責六波羅
氏久射術戰四雄
有元一族闘死洛陽
長宗單騎露勇力
先帝自修金輪法
忠顕領衆軍洛城
忠顕遽退西山陣
京勢焼雒西靈刹

卷之九

高時重發遣援兵
献誓紙高氏上華洛
感未來記親光属官軍
範家伏田畔射高家
高氏桂河陣談勝敗
露逆心高氏越大江山
高氏篠村募義兵
八幡廟高氏篭願文
官兵武軍對陣雒陽
通治内野戰高氏
長宗再度露勇力

三方官軍圍六波羅
時益仲時没落帝都
瞞野伏中吉全身命
新帝上皇沈落江州
仲時主従自殺番馬
千剣破寄手敗走南都
正成傳令討歸軍

巻之十

千壽道鎌倉竹若死浮島
義益挑言試義貞
鎌倉殿中論定課役
義貞斬両使起義兵
源平交兵戰入間川
義貞進兵陣久米河
義貞拆兵退堀金
三浦曳黨加新田陣
義勝謀破鎌倉勢
安保横淸救慧性
義貞大軍乱入鎌倉
本間出不意討宗氏
義貞誠心退海潮
爲基大戰由井濱

鎌倉諸將鬪死大畧

聖秀守忠節死義

盛高昊亀壽忍信州

慧性詐死落奥州

高重泰問南山雲禪師

高重謀欲討義貞

高重剔腸魁冥府

北條一門滅東勝寺

巻之十一

義貞速平定鎌倉

宗繁變心贖邦時

主上取笠還幸雒洛

義貞奏鎌倉靜謐

正成引兵參向淇州

寂阿擇田射大蛇

少貳大伴變約討寂阿

少貳大伴反義害英時

時直乞降安堵懸命地

時春妻子沈鎌府河

時在一類滅北越

愛着亡靈現海上

正成送書降公綱

正成降千剣破寄手諸將
鎌府降参諸將被誅
工藤左衛門鎌倉述懐舊
天下政道歸公家一統
護良親王任將軍入雒陽
配流月卿歸華洛
藤房称病辞奉行
造營大内裡極結搆
附 菅神辨因意始末

巻之十二

藤房卿與正成閑談時世
藤房卿正成再論時世
被修安鎮國家法
違勅命千葉三浦爭威
正成闇夜取邊要砦
正成移兵攻飯盛城
正成揮泪斬小車妻正春
正成暗落飯盛城
開國諸將行恩賞
忠顕文觀誇賞事驕奢
廣有内裡射化烏
修造神泉苑禳妖災

良忠誅殺足利兄弟
准后便佞蹈護良親王
高貞内裏献龍馬
公賢例八駿賀天馬
藤房卿因馬奉諫言
藤房卿重奉諫言
藤房卿月夜閑談正成
藤房卿遁世隠跡
勅而誅良忠已下候人
護良親王流刑鎌倉

總目録尾

南北太平記圖會巻之八

貳編

目次

時信時知発向播州
圓心再度戰京勢
圓心追北逼六波羅
則祐前騎渡大井川
河野陶山破赤松兵
圓心二責六波羅
禁裏仙洞被行御修法
則祐遮半途走京勢
山門應牒叛六波羅

豪鑒豪仙恵戰死義
圓心三責六波羅
氏久射術戰四雄
有元一族闘死洛陽
長宗單騎露勇力
前帝自修金輪法
忠顕領衆軍洛城
忠顕還退西山陣
京勢焼雑西霊刹

南北太平記圖會巻之八

貳編

圓心再闘京勢

時信時知發向播州

先帝已て船上て着御成て。隱岐判官清高合戰て打負て後。近國の武士皆船上ふ馳参るよし。出雲伯耆の早勇頻並を打て六波羅へ告くるなり。

事已て琢事て及びぬと聞人色を失ひる。是ふ附ても京近き所て敵の足を留させくるを叶ふまじ。先摂津广耶の城へ押寄赤松を退治もべしとて。佐々木判官時信常陸前司時知て四十八ケ所の篝火在京人並ふ三井寺法師三百余人を相副て己上五千余騎を广耶の城へぞ被向ける。其勢閏二月五日京都を立て路次て又馳集る勢二千余騎ありければ。先陳ハ時知二千余騎二陣ハ時信二千余騎。其間五六町を隔てり。三陣ハ三井寺法師て諸国の集て勢二千余騎。一里計曳下てぞ打ける。同十一日の夘刻て广耶の城乃

南の麓なる求塚八幡林よりぞ寄せける。赤松次郎入道圓心是を見て。態
と敵を難所へ誘引寄むとの足軽の射手百人計を麓へ下し遠矢少く射させ
て城へ引上りければ是を隨あて寄手の大勢一度に進むと勇みたる。時知下
知して二百余人の足軽を先に立て。赤松の勢の北を追て上らせける。山城藏
人光秀といふ者大将の下知をも不待。三十騎計にて足軽に添て馳上る程
に。惣勢何ぞ猶預もべきや。留てもの不止勝に乗て差も嶮しき南の坂を。
人馬の息をも不継我劣じと責上る。時知今ら制もべき様もあれぬ千勢
二百余騎跡に付てぞ上りける。二陣の時信大に驚き軍使を馳て。城の可落様
や有如何あれば坐に深入りぬぞと申遣しければ。時知のやとよ先の兵の進み上
ん可留にはらむと返事して。尚操り操ぐ上りければ。是非
なく跡に添てぞ上りける。此山へ登ること七曲として路嶮しく最細き雑所なり。先陣の
輩鎧の重きに絶兼て。此所を上り送まる程に。二陣の時信も阪半にて追

附きぬ。赤松が敵の足の稍く疲たるを見済て子息律師則祐飽間九郎左
衛門光泰二人に百人の射手を差副南の尾崎へ下降て矢種を不惜散々に射
させける。寄手これに射たまされて。互に人を捨て成て其陰に隠れんと色めく
所を赤松入道子息信濃守範資。同筑前守貞範。佐用上月小寺頓宮一黨
五百余人。鋒を双べて大山の崩るごとく如く二の尾より切て下りければ寄手の大
勢脈々として麓の方へ捲り落され。討るる者數を知らず。時信時知の二人は走り廻
て敵は小勢なるぞ跡より引立て返せやと下知をれども。更に耳にも不聞入我
先にと引退きければ。後陣に扣へ三井寺法師ハ人の敵をも不見て頻北へ
逃さるる時信時知も心を弥雄ふりとの。後ハ深田あて馬の蹄膝を
前ハ荊棘生繁つて。行路弥狭ければ返さんとすれども便なけ
もなく。心あらばも逃る味方に誘れて散々の躰にて引取る。去ハ城の麓より武庫河
の西の縁を。道三里の間人馬上ず上て重りて死に行人路を去不敢打向ふ時七千余

騎と聞へも僅千騎ゝ足ぐ引ゆかりくれば。京中六波羅の周章大うさゝ〳〵。
雖然敵近国ゝ起て属順ふ勢左而已多〳〵も同へぬば。彼ひ一度二度の勝ふ
作麼何程の事ゝ仕出さぐき敵の分限を推量て此度の敗軍引ども揮を失ぢ
斯る所ふ備前国の地頭御家人も大略敵ゝ成ぬと聞へくまぐ。両六波羅ゝ詰将
會合安ゝぬ事ゝ西国中國ゝ謀叛の輩追〳〵ふ蜂起し。其上赤松動され
ば都と窺ふて心懼くれ。此上ハ广耶城ゝ勢の重らざる已前ゝ。速ゝ討手を
可被差向ゝて。十八日一万余騎の勢を差下を。此時両六波羅の内一人被罷
ふで。赤松忽ち可滅を。自分不下のこゝろ〳〵可然大将も不撰名もあき下
将の輩ゝ。二万余騎を差副て被下事。安ふ無云甲斐ぞ覚くる。赤松入道の
由を聞て。勝軍の利ハ謀不意ゝ出て。大敵の気を凌ぎ須臾ゝ変化して。先
ぢくゝ不如と。三千余騎を率し广耶城を出て。久〳〵知酒部の辺まで神
出を所ゝ三月十日。六波羅勢已ゝ瀬川ゝ着ぬとさゝやくれば。今宵も此所ゝ

陣をとり明日不意ふ寄ゝて合戦をと。赤松勢少し油断して。一村雨の過くる程
ゝ物の具の濡ぬるを燥さんとて。僅ゝ此彼の在家ゝ込入く。雨の晴間を待くる
所ゝ。阿波の小寺原光長尼崎ゝ船を留めて陸ゝ上り。三千余騎を率して俄ゝ
此所へ押寄ぬる。赤松大ゝ驚き絶ゝ在合ふ手廻り五十余騎ゝて。大勢の中に
懸入面も不振戦ひくるぐ大敵凌ゝ叶ぬ。ゝだ四十七騎闘死し。父子六騎ゝた
て成ゝくる。赤松父子皆挨を捜捨て。尚も簇る中へ孤と交り。四角八方へ懸
廻りくるふ。敵ゝ印鎧の毛色もゝくゝざれば見分ぢや有ぐむ。又天運の助ふや
懸りくむ父子六騎無恙多勢の中をかけ抜く。小屋野の宿の西。三千余
騎あて扣へる味方の中へ独入く虎口の死を社道ゝくる。明ぬば十一日六波羅勢
ハ昨日不意を討く。勝を取といへども。赤松の勇鋭欺さ難しと思ひくまぐ瀬川
の宿ふ扣へく敢て不進。赤松ハ又昨日敗軍の士卒を集め。殿れる輩を待
調ん為く拠ゝ不懸互ゝ陣を阻ぢ未ぢ雌雄を決せぢありくるぐ。赤松熟思

ふ様下壮請ゝ軍旅ふ疲れあゞ敵ゝ気を被奪べし速ふ不如戦とて三千余騎を将ひ懐河の陣へ押寄て先手の體と伺ひ見るゝ。瀬川宿の東栗家々の旗二三百流、梢の風ゝ翻て其勢二三万騎もあらんと見えゝ。味方を見ふ籌すれば百ゝて其一三ゝも可校ゝ見えざりゝれば。赤松の勢案ゝ相違。一先ゞ耶城へ引退さゝふ事可然ゝ喂きゝる。田心是を聞より憤然として申ゝゝ今退きゝば。敵定めて追撃ゝさべし。然らば。負の上の負ゝゝべし。所詮運を天ゝ任せ戦ふより外ゝ可勝道なし。唯討死と志し。敵の備ゝ蒐入。雌雄を決せよや幾原と呼ゝ。敗軍の士卒を引立て敵の備へ間近く進ゝれば。何ゝ以て猶豫すべき田心の二男筑前守貞範同猶子佐用兵庫助範家。同聟宇野飯登守國頼中山五郎左衛門尉光註。飯間九郎左衛門尉光泰。外ふ良等二人真先ゝ進むで行の陰より南の山へ打襄る。敵是を見て楯の端少動きそたゝ鋭る気と見ゝゝ。左ゝあるで急ゝ赤松が押寄ゝるゝ周章敵ゝく気色ゝみえゝれば。七騎の輩馬より飛下り竹の叢滋りゝるとふ楯ゝ取て。差攻引攻散々ゝ射ゝゝる。瀬川の宿の南北三十余町ゝ皆の子を打ゝる如くゝ扣へゝる敵ゝれば。何ゝ可脱矢頃近き輩二十五騎。真逆ゝ被射落るまべ。大ゝ強ぎて矢面ある人を楯ゝあゝて。馬を射ゝ逆と立兼ゝる。是を見ゝる赤松が一類手野伊勢前司光範を始と。上月田中小寺八木衣笠頓宮の若者。亟や敵ハ色めきゝるゝと。胡籙を叩き凱音を造りて七百余騎。鬱を双べゝ懸ゝる。れば六波羅の大軍怒ちゝ聞き鹿き。先陣支れども後陣不続一陣返せども二陣不救行先挟れば閑ゝ引やと下知すれども耳ふも不聞入。子ハ親を捨良手ハ主を知らで。我先ゝゝ八方へ落行ゝる程ゝ。其勢残り少なゝく被討成縄ゝ京へ引帰ゝる。始の義勢ゝ引替て見苦しくゝて見えゝゝる。赤松十分ゝ打勝手負生捕の首三百余級宿の河原ゝ切懸させ。軍を収て耶城へ引帰らんとゝる。田心が三男師律師則祐進ゝ出て申ゝゝ。軍の利ハ勝ゝ乗て北ゝ追ゝ不如。今寄手の名字と聞ゝ。京都の勢数を

赤松則祐
先懸して
大井川を
渡を図

尽して向ふてゐるり。此輩今四五日ら長途の負軍に草臥て人馬ともに物の用
に不可立。臆病神の不覚前に続て責るとのあるべ。奈何一戦の中ふ六波羅を責
破らでゐのべき。是太公が兵法に出て。子房が心底に秘せ所にいつぞやと進るれ
ハ。諸将皆此義に同じ其夜聽て宿河原を立て路次の在家に火を懸其光り
を手松として迯る敵に追掾り京都迄てぞ責上る

則祐前騎渡大井河
圓心追北逼六波羅

六波羅に斯る事とハ夢にも不知。戸耶城へ大勢を下しつれば。敵を責落さん
事。數日を過べらべと心安く思ひ。其左右今やくと待々る所に。寄手の兵打負
て八方へ落失々る由。披露區々にして実説ハ未聞とのべども。何とやらん不審端多
き所に。三月十二日甲戌刻に渡赤井山寿西岡辺三十四ヶ所に火を懸らるゝ
何事ぞと尋るに赤松が勢已に三方より寄るとて。京中騒の涌が如く上
を下へと騒動も六波羅の両将大に驚きて急ぎ地蔵堂の鐘を鳴し。洛中の勢
も被集れども宗徒の勢ハ戸耶城に追込られて。右往左往に逃散て不敢徒
く奉行頭人ども。肥脹して有共が馬に早乗らるて四五百騎。他集りされども。
皆唯あくまで計にて為指義勢もあらざり。斯て々如何ぞべきやとて。六波
羅の北方裁後守仲時事の體を考ふに敵を雖中に相待むとハ。武略の不
足に似たり。速に雖外に迯向て防がんハ不然とて。西撿断隅田高橋に命じ
播州の敗軍の勢に在京の武士を此彼駆集め其勢都合二万余騎あり。時衣
更着の南風に雪とけて。河水岸に余るべきなれば桂川を阻て戦ふべしと下知。
今在家作道西朱雀西八条より差向る。去ぬるに赤松入道ハ三千余騎を二手に
分て一手ハ円心自ら大将として。搦手ハ高倉少将の子息左兵衛佐を大将として人我
縄手西の七条の西道より押寄せり。大手の勢桂川の西の岸に打臨て川向ひ
ある六波羅勢を見渡せば。鳥羽の秋の山風に。家々の旗翻翻として。城南の離
宮の西門より作道四塚羅城門の東西を懸。西の七条口まで支へて雲霞の如く

ふ充満と。然れども六彼羅の仲時河を隔て防ぐべきよし被下知ゝる間。其逓さを守て。唯一人河を渡む。寄手も又思ひの外敵大勢ゝ思惟して垂左右打入んもせず。唯両陣互に河を阻て矢軍ゝ時をぞ移しける。此時高橋判官八河の上下を巡つて。敵の小勢ゝを見積り此方より川を渡さん事ゝ。隅田太郎左衛門押止めて申ける。先年渡辺へ向ひ時楠が勢ゝ陰置ゝと実の無勢と心得川を渡して不覚をとる。今ゝ人の物笑ひとなれり。今赤松が勢を見るに二千ゝハ過じと思ふなり。是程の小勢ゝて京都責上るべきよあらず。必定大勢を後ゝ隠しゝそあれ。已前ゝも不懲此河を渡して不覚をとるべ。唯ゝ面を可向哉其上六波羅殿も河を前ゝ防べ防とゝそ被仰ひつれゝそ用心せよ。高橋重ゝ以前ハ知猛深き楠なれ故ゝ被儻偶てひへ今血気無謀の赤松何ぞ斯る術あらんや是非ゝ河渡まべしと両人義論ゝ時を移を所ゝ。寄手の方より師律師則祐馬を放て歩立ゝあり。矢束解て押窺げ。一枚楯の陰より引攻々々散々ゝ射てあり。ゝ箭軍ゝ。ふてゝ迎も勝負ハ決せず。しばゝ脱置ゝ鎧を脱ゝ無技曽の緒と引縮腹帯を堅めて岸より下へ打下。手綱ゝひゝ川水ゝ乗入んとあるゝ。父の入道遥ゝ見付。馬打寄て面ゝ塞り。斯物ゝ狂ふ則祐。昔佐々木三郎が藤戸を渡ゝ。足利又太郎が宇治川を渉しける。勇て漂冷を立て案内を見置敵の無勢を察して先を争ゝ者あり。今川上の雪消水増りて。淵瀬もこんぬ大河と。曽て浅深の案内も不知して渡さば可被渡。縦ひ馬強ゝて渡るを得ずとも。あの大勢の中へ唯一騎懸入ゝんあるゝ。豈不被対ゝ云支の有べき。天下の安危必ゝも此一戦ゝ不可限。暫く命を全ゝして君の御代を待んと思ふ心ハあるべきと再三強て制しけれども。則祐馬を立直ゝ抜ゝる太刀を収め気色を正して申ける。如仰味方と敵と可対揚程の勢ハそなれども我ゝ十と不碎ども運を合戦の勝負ゝ任せて見候べきぞ味方ハ僅ゝ三千余騎敵ハ是

て百倍せり。急て合戦を不決して。歟て無勢の程を被見透ひらぐ雖戦不可亡利されば太公の兵道の詞て兵勝之術密察歟人之揆而速乘其利復疾擊其不意とかり。是を以吾困兵敗歟強陣計あてひんどやうそこ退るへく云捨て駿馬の鞭を進め漲て流るく瀬枕て。逆波を立てぞ游ゲせる。見之飽間九郎左衛門紂東大輔河原林の次郎宇野飯登守木寺相摸坊五騎相双びて川水て飢て打入て。中て宇野と伊東ハ馬強て。文字て流を截て渡りるるが。木寺乃相摸坊ハ逆巻水て馬を放れて。曹の手及計僅て浮て見えるるが。波の中もや游さるん。又水底を潜りるん。より前て渡り付て。河の向ふの岸て鎧の水瀝てぞ立さりる。則祐相摸ハ先へ行ぬ続て宇野伊東飽間河原林も懸上まぶ。六波羅の二万余騎彼等六人の振舞を見て尋常の者あるんとや思ひるん。人馬東西て辟易して敢て無合さんとする者なく。剰楯の端四途路て成て。色めき渡ると云ふれば。赤松入道大音揚前懸の味方討もる続けや続けと呼りるれば

信濃守範資筑前守貞範佐用上月を始め逞兵三千余騎一度て飢と打入て馬を筏て流れを堰上られば。逆水岸て余て浪十方て分れて元の淵瀬ハ中ホ。陸地を行が如くして。三千余騎の兵一騎も不流死を一挙て狂んじて此方の岸へ喚て上りるれば六波羅の大軍其勢ひて気を呑れけ。しるや思ひるん。一戦ホも及ばず。楯を捨旗を引て作道を北へ。東寺をさして逃るもあるべ竹田街道法性寺の大路へ落るるあり。其道三三十町て間捨て物の具地て満て馬蹄の塵て埋沒を始隅田高橋此方より河を渡りあべ斯敗軍ハとほきて長食議ホ時を移し。寄手て先を懸られ此より破れて成て。此手の軍既て敗れて而已あるべ。西七条へ向ふて赤松の搦手島倉左衛門伯小寺衣笠の者ども早雑中へ責入て。大宮猪熊堀川油小路の間五十余ヶ所て火を懸て。又七条八条九条の間て。戦ひ始りと覚えて。汗馬東西て馳違ひ鬨声天地て響て大三災一時て起て。世界尽て却六の焔て焼失ると疑る。此時已小夜

入くゝ子の刻計の事なれば日差ともあらぬ暗き夜に鯨波此彼小聞えて勢の多少も軍立の様も見分されば何地へ何と向あて軍可為とも不覚六波羅勢は逆と失ひ皆六条川原に馳集り悶果てそ扣えける

河野陶山破赤松兵　圓心二責六波羅

かくて夜明て日野中納言資名卿左大辨宰相資明の両卿同車して内裏へ参りうひ〳〵れば四門徒に用心警固の武士八人もあり主上南殿に出御成く雑の候と御尋あるに衛府諸司の官蘭臺金馬の臣も何地へか行くゝ匂雷内侍と上重二人より外は御前に候さる者も無資名資明の両卿御前に参じて宮軍戦ひ利あらず逆徒不期に洛中へ襲ひ来りしかゝ様にて御座ひ候賊徒差違て御所中へも乱入可仕と覚ては急ぎ三種の神器を先々て六波羅へ行車成ひ〳〵しく被申くるに主上驚て瑞輿に被召二條河原より六波羅行車成依て堀川大納言三条源大納言鷲尾中納言坊城宰相已下月卿雲客二十余人路次に参着して供奉し申されるに是を聞食て院の法皇東宮皇后摂井二品親王まで皆六波羅へと御車ある間供奉の卿相雲客軍勢の中に交て警蹕の声頻りあるに是さて六波羅の仰天一方あるべ俄に六波羅の北の方を明て仙院皇居とあれと事の躰強に引り有様あり驚て両六波羅の三万余騎を引率して七条川原に打立て近付敵を待れけるに敵も此大勢を見て流石に臆倦てや有けん只此彼に走散て火と無時の声を作る計にて更に此所へも近付ず赤松貞範則祐兄弟は北の京勢に紛まて雑中へ蒐入何地に在とも不分ぬ父の田心に軍も不成六百余騎にて九条に陣をそ扣えける両六波羅は始終の様子を伺ひ何様敵は小勢と覚ぬそ速に追散せ〳〵隅田高橋に三千余騎を相副て八条口へ差向陶山河野に二千余騎を差副て蓮華王院へ差向ける陶山次郎は道すがら河野九郎左衛門其余の輩も皆夫々に口々へ〳〵そ被向ける陶山次郎は道すがら河野九郎左衛門ふ向て申くるは何とも心の不知取集勢に交て軍をするさは然に足手纏に成く

懸引自在なるべうもないざや六波羅殿より被差副さる勢を八条河原へ扣せ
て時の声を作らせ。我等ハ手勢を引勝て蓮華王院の東より敵の中へ無入
蜘手十文字に打破り。弓手妻手に相付て追物射に射てくれんハ如何ぶ
と談じられば。河野も最も可然と同じ外様の勢二千余騎に合図を定め八条
塩小路の道場の前へ差遣し。河野ら勢三百余騎陶山が勢百五十余騎に引分
れて蓮華王院の東へ廻り巳に合図の程さも成られば八条口ハ扣えさる
二千余騎の勢時を出とぞ揚さる此手に向ひ赤松勢同じく関を合
て寄合むと馬を西頭に立さる所へ思ひもよらぬ河野陶山が四百五十余騎後
より時を作て赤松が勢の中へ無二無三に蒐入東西南北に馳廻り一所に足を
留させじ。追立く責破り河野と陶山と一所に合てる両方へ立別れ両所に分
まて一所に合。七八度が程揉ひ合うが長途に疲れさる赤松の歩立武者馬蹄
ある兵に被懸悩討る者数を志ぬ。千負を捨て道を要り散々に成て引

退く。河野陶山ハ勝に乗て打勝逃る敵に目も不無西七条の合戦無心元
と七条河原を直違に西へ打て朱雀の方を見遣られば。隅田高橋が三千余騎
高倉左兵衛佐小寺衣笠が二千余騎と責戦ひ動されば馬の足並乱るとみえ
られば。河野九郎左兵衛尉を見るに角に味方被討ぬと覚やりそのまま打入
むと申られ。陶山次郎押止め今此陣の軍のまま唯雄を決せざる前に力を合
て助けるとも隅田高橋が日頃の口の悪さに己が鳥名にぞ謂るーぬるん。暫く見合て
事の様を御覧せよ敵縦ひ勝に乗るとも何程の事か可有そて見物してぞ
居さうなる。案に不違隅田高橋が勢小まう計に無られ敵に前後を立切れ無人とも
るも不叶引んとすれども不叶散々に打ふされ渝二方を切ひらき朱雀を上りこ
内野を差て引もあり七条を東へ逃るもあり馬に放れさる者は心ふとく敵に
追詰られ返合せて死るもあり陶山是を見て今ハ余りに詠め居て味方の弱
り為出さんも詮なしいざや懸合して助けんと申られば。河野子細やあらで

河野陶山
赤松が兵
を破る図

ゆふ侯と両勢一手と成て島倉左素門が後より懸出て四武の衝陳堅と砕き。百戦の勇力変て應せざる寄手又此陣の軍も陶山河野と打崩されて寺戸と西へ引退く。筑前守貞範舎弟律師則祐の二人は桂川を渡て敵を破り。逃るを追て続く味方の無をも不知。主従唯六騎ふて竹田口を上り法性寺の大路を懸通り。六条河原へ打出て六波羅の舘へ参入んと続く味方を待る処に。東より寄る味方已と打負て引返しをと覚る。東西南北敵より外はなくて去ぬ。旗に此中に紛れ入て。御方を待べしと。六騎の輩皆笠符を捨て。隅田島橋が西七条より引退き。乱れ来る中へ打交て知れる処に。隅田島橋味方の中を打通て何様赤松が兵味方と紛れ此中に在と覚るぞ。河を渡さじ敵ふるべ馬物具の濡ざるは不可有。其を験に組討と打てとと呼わりれば。貞範則祐今は紛るるとも紛れ難ければ。兄弟良従唯六騎巻を返べ吐と喚て二十騎の中へ懸入。此に顕れ彼に紛れ。秘術を尽して相戦ふ去ば此所に軍あるとそ

それは追て沙汰と懸て弛集る六波羅勢是程小赤松小人数あるとは可思寄事あるれど何ぞと敵と見定めず。東西南北入乱れて。同士討する事数射あり。貞範則祐も大敵を凌ぐ事勢久しかるべき。良従四騎は此彼にて被討ぬ。貞範が敵の為に被押隔て其所を不知。則祐唯一騎に成て。七条を西へ大宮を下りに落ぬる所に。印具尾張守が良等八騎。追懸て敵あるとも誰と覚ぬ者にて。唯人にて御坐ぞ御名乗ぬと云れば。則祐馬を閑に打て。身不肖に候とも御存知不可有。只首を取て人に被見ぬと云侯に敵近づけを返し合せ敵退くぞ馬を歩せ。二十余町が間八騎の敵と打連て心閑にして落行る西八条の寺の前と南へ打出るまば兄信濃守範資三百余騎にて。羅城門の前なる水の渡ざに。馬の足を冷して敗軍の兵を集めんと旗打立て扣えたり。則祐夫と見より諸鐙を合せて其中へ弛入るまぞ追来りつる印具が良等八騎。餘敵と見る物を遂に打漏しなる事の不安と嘆て馬の鼻を引返しぬ。範資則祐

暫く此所に息を継ぐる間に又の入道圓心筑前守貞範を始め七条河原西朱雀
て彼懸散らる兵。此彼より馳集て又千余に成にけり。赤松入道馬上に即
あらそも此侭引んも無念あり。今一軍可成とそ。取て返て此兵を東西の小路に
進ませ。七条辺にて又鬨を揚らるべし。六波羅の軍勢七千余騎。敵捷敵は引
返しらるそ打向て追散せとそ侭に。六条院を後に當て追つ返しつ二時計りそ
責合る。角て此軍の勝負何果べしとも見えさりければ。陶山河野の二人五百余
騎を率て大宮を下りに打向ひ。赤松か後へ廻り引裏で攻らるれば四方備
忽ち後陣より崩れ立。又若干の兵を失ひ一方を打破て僅の勢を従へ。山
崎を指てそ引らる。河野陶山も勝に乗て作道の辺まで追かけらるる動
すれば赤松取て返さんとする勢あるを見て。軍は是まてぞ左而已長追なそ
こそ。鳥羽殿の前より引返し。虜二十四人首七十三取て鋒に貫き。失に成て
六波羅に馳参る。主上は御簾を捲せて叡覧あり。西六波羅は事皮に

是を検知し両人の行跡何の事あれども。殊更今夜合戦秀手を下命を
軽しとうはまとは叶ふ間敷とて覚えひつまと再三感称して賞翫せられ其夜
軈て臨時の宣下あって。河野九郎左衛門を對馬守に被成て御剱を賜り陶山
次郎を備中守に被成て寮の御馬を被下るべし。是を見聞武士適弓矢の面
目なりと。或は羨み又は猜でロ々に評論し。其名を天下に被知ける。是に引替隅田
高橋を始め何の功をも不為輩は軍散じて翌日。京中を馳廻りて。此彼の堀溝に倒
居らる手負死人の首共を取集めて。西六波羅の検知を受。六条河原に幾并べらるる其
数八百七十三あり。敵是程に多くは被討ざりけれども。何の功ある軍勢共我劣
名に備んと。洛中辺土の在家人あんどの首を假首にして様々の名を書付て差
出しらるるのことぞ聞へける。其中にも赤松入道圓心と札を付る首五百有り。
何をも見知る者あるうれば。門様にこそ被懸る。是を見て京童部首を假
る者共利子を付て可返。赤松入道如斯分身にしらるる弥敵の尽ざる相うるぞと。

口々ふゝて笑ひ合れ

禁裏仙洞被行御修法　則祐遮半途走京勢

此頃四海大に乱て兵火天を掠む。聖主戸衣を負て春秋無安時。武臣弓を建て旌旗無閑日。是以法威逆臣を不鎮ば。静謐其期不可有とて。諸寺諸社より課て大法秘法をぞ被修る。掲井宮ハ聖主の御連枝山門の座主にて御座れば禁裏に檀を立て佛眼の法を行せらる。裏辻の慈什僧正ハ仙洞にて薬師の法を行る。武家亦山門南都園城寺の衆徒の心を取。炅鑑の加護を仰む為に所々の庄園を寄進し。種々の神宝を献て。祈禱被致しかども。公家の政道不正武家の積悪禍ひ遠からざれば。祈ども神不享非禮語ども人不貪利欲ゆゑ。唯日を遂て国々より急を告る事隙あらず。去ば三月十二日の合戦に赤松が負て山崎へ退き。頓て追掾て討手ぐふ下るべき敵の見えたもほのかなるを。今ハ何程の事か可有とて由断して打捨被置事ども不覚あれ。粤に中院中将宗平朝臣ハ西岩倉に忍び居うひ〻〻去る十二日の昏方に京中合戦の様子を聞て。俄に五百余騎の勢を催取物も取不敢ず出たりけるに。早赤松が軍利あらじて山崎へ引帰る。路次向日明神の前に端あくも行會被申ぬ。心父子大に喜び偕ひて山崎に帰り。定平朝臣を偽て聖護院の宮と称し。尚敗軍を裹め戈勢を募る所に翌十三日午刻計に其勢二千余騎男山の麓に旗を立。其手の守将と覚き者四五騎を従へ河舟に乗て渡り来りければ。凡心父子不審おのゝ人を出して誰ぞと問せるに。彼者答へて云様。是ハ大塔宮の執事殿の法印良忠と申者にて候。宮も大和に御忍び住まし。千破剣の後結を御心懸らるゝとも。寄手以の外大勢にて候。御心計にて黙止る所に貴辺弥義戦に与して京都を責るゝ上。被閑召急ぎ力を合せよとて。我等を被遣ぬと伸れば。祐走り出て是を迎へ別の情を伸て互に手を挑まめ泪ぐむ。せびる。斯てあるべき赤松まこと大勢に成て。河尻を差塞ぎ西国往返の道を止

々る依之雑中の高貴留て。士卒皆轉漕の助けに迷惑せ。六波羅聞之赤松
一人に洛中を被悩て。士卒を被苦事こそ安からぬ去ぬる十二日の合戦敵左
まで。大勢にても無りける物を。亦云甲斐閑怪しく。敵を近き辺境の間に閉く
こそ武家後代の恥辱なれ。所詮此度にあるべく。官軍遽て八幡山崎に押寄せ両
陣を責落して賊徒を河に追湮。其首を取て六条河原に可曝と被下知ければ。
四十八箇所の義兵に在京人。其勢五十余騎五条河原に勢揃して。三月十五日の
卯刻に山崎へとぞ向ひける。始は二手に分て久我縄手は路細く泥田なれ
ば。馬の乗引も自在あるまじとて。八条より一手にあり桂川を渡り河嶋の南
を経て物集女大原野の前へとぞ寄せける。圓心京勢の寄ると聞て。山
崎に待うけて戦はんと評定しける。三男則祐進に出て。味方は六波羅の為あは
小敵なり。六波羅は味方の為には大敵。其大敵に久我畷の深田の難所を被越て
は戦ひ利あるべき通身の分限に過たる敵には。十死一生の合戦にてあるまじ

くまでと申さるべき。圓心暫らく思案して申。振九軍は心の剛なる侭に勇を憑
する時は。不覚の負を仕出して侍る。弓取の十死一生の合戦とは。味方弱くして
外に助けの勢多く。口を経て随く敵に勢重りて強く。御方は日々に兵減して
弱りぬる時にて。十死一生の軍をあるべしと。入道は習ひなれる但し。信州筑州は如何と
問はるべきなれども。紀資貞則二人こそ。良智五郎滑で有るなれ。筑前守は寄せ
余りに時の移りぬる則祐何と存るぞ。汝ぢ胸に思ふ子細のあるべ。可残事にあ
らぬ疾被申ぬとありければ。則祐縁して父の仰をば何かは可背哉と申け
まば。円心居丈高に成て。是は大事の評定に存ぜる旨あるべ。猶兼ねんと声を変
くれば。則祐去ば愚意を申入べし。父の仰の如く十死一生の合戦。帯々無物にて然べき
此時に当て。十死一生の合戦不仕ぬ。其故は味方は三千余騎敵は二
倍せり。若久我縄手の難所を越て山崎の傍り近き嶺々里々の要害に陣を堅くして
日々無合せく仕ぬ。味方強くとも戦ひ牛角に成侍らん。牛角の戦ひ侍べ。

山門の衆徒
豪鑒
豪仙
悪戦
討死
の図

大勢の方に利有て小勢の方に利なし。是亡瑞の其一に。又良将の雑所を前に置
と謂へ。敵の雑所を我ん所を討んが為に然ふ其場を脱して何地にて可対や是亡
瑞の其二に但し雑所を我させて安く可対術も侍らんら夫は不存ぬ又謀なき為
に発て先んぜらるる不如と。太公の申置しは今此時に當りてや侍らん。敵味方の
兵相對して戦ふてはひつぐ。此外の謀はいくらもひべし。味方の小勢と敵の大勢と
如尋常戦はひらくは豈勝を得んや。今寄手は大勢味方は小勢なれば是まで出會
て戦ふてはは不可有と油断して通らん所を。俄に旗を挙て対て無り。大勢り
動轉させて一定味方の勝利あるべしれ。況や小勢の大勢に勝と云。聽気ふ
も雖有事にて侍る。然るに此図を脱して。山崎まで敵を引後ひは。味方甚だ
危ふらん。是亡瑞の其三に然れば則祐に於て八幡山崎に残し二千余
騎を三手に分て。半途に出て戦へ。大勢を防ぐ便は深田に赴く物なれば一定
御方の勝と存ぜらる如何に信州筑州の御異見聞まほしく事に候く伸

るべき範資も貞範も信服して顔して打點頭て居さうなれば父の田心泪
をもらすと盈て。世に田心程能果報に生れる者は希に侍らん。凡人は子う
さぞさる宝なりと。古人も申侍てき愚なるさへ然あり。況や我三子何まも良
将なり。田心一期の後も家の栄んと必せり。更に思ひ残も事あり。此上は三人の
子供に。合戦の異見をば任せん。実も斯図に當る合戦を不為て敗軍せ
べ。後代の嘲に遺る所なり。図に當る合戦をあして負るべ。天下の人も運乃
極と可歎義に随ひ運を天に任せて戦へや子供等と申されば。三人の子息
大に悦び三千余騎を三手に分。一手は足軽の射手を勝て。五百余人を小塩
山へ廻し。一手は野伏に騎馬の兵を交て。千余人を狐河に扣えさせ一手は混に打
物の輩八百余騎を汰て。向日明神の後なる松原の陰に伏置て。京勢今や
遅しと待兼る
○後正成此軍を評して曰。田心が如謂山崎に待られべしと。京勢山崎

近き傍の山々里々に陳を取て。日數を經て戰ふに。利あるべし。終日戰ひ疲れ夕陽に及ぶ。長々と京まで曳んにて。久我縄手の深田の難所を引うゝさうん所を。赤松が後ふて戰ひを決せば。京勢殘少に被討ぬるの。則祐思ひよらざる所へ出向て戰ふに利あるべしと知とのべども。京勢の智謀を不辨敵に依て轉化をるの利を疎し。山崎に待て戰ふに利ありとのべども。四心又深き心を知て申さるゝにあらざる。然れば山崎に待て戰ひ勝ども。是盲勝にて良將の深く謀て勝さるに似るべくもあらば。去共末代に赤松父子ばかり。合戰の道を辨へざるも。希なるべしと申々ありけり。

六波羅勢は敵に斯る術有て。是すでに可出合とは思ひ不寄請に進むて寺戸の在家に火を放て先陣已に向日明神の前をおさへる處に。善峯岩藏の上より。足輕の射手一牧楯を手々に提。蓑に折下て散々に射る寄手の兵ども。是を見て馬の鼻をそらべて懸散さんともれば山嶮ふかして上へ不得。廣に誘引出して討んともれども。赤松が勢是を心得て山を不下。寄手の輩厭倦果て。とやかくさうぬ野賊共に目を懸て。骨を折て無用なり。此をば打捨て山崎へ打通るべしと議して。西國を南へおろる處に。思ひもよらぬ向日明神の松原より。坊城左京門尉五十騎余にて。あて無出。大勢の中へ切て入。六波羅勢。その小勢なるを侮て。真中に追取込。余は物と責戰ふ處へ。又田中小寺八木神沢の輩。此彼より百騎二百騎あつまれ出。奥鮮に進み鶴翼に圍んと操寄ければ。六波羅勢大に周章色めき立て崩んとす。是を見て狐川に扣て赤松が勢千余騎。時分はと縄手を傳ひ。六波羅勢の跡をさんと。道を要て打廻りける程。京勢いよ〳〵動揺して。迚も叶はじとや思ひけん。捨鞭おて引返す。赤松が勢。凱音を作り。諸手に成て徑より。跡を慕ひ追蒐る。此戰ひ片時の間なれば。多くは被討ざりけれども。堀溝深田に落入て。馬物具皆取所もなく泥り

臓をとるまゝく白晝に京中に北入六波羅にて打通ると見物しる人毎に哀さうとも河野陶山と。被差向いろぐ。是程に臓を負へある迄き物と。笑ひ者もなりうり。去ば此度向ひで京に被残る。河野陶山ゞ手柄の程いとゞ名高く成にゝり

山門應牒歙六波羅　豪鑒豪仙悪戰死義

京都に合戰始りて。官軍動きれば利を失ふ由其聞え有る。大塔宮より牒使を被立て山門の衆徒をぞ語ひ給ひける。依之三月廿六日ふ一山の凡僧大講堂の庭に會合て云。夫吾山者為七社應化之霊地。作西王鎮護之藩離。高祖大師占開基之始。観窓前雖弄天真獨朗之夜月。慈慧僧正為貫項之後恐辱衣上忽帯魔障降伏之秋霜。尓来妖孽見天則振法威而攘之。逆暴乱国則借神力而退之。肆神猟山王須右非三非一之深理。矣山言比叡所以佛法王法之相比焉而今四海方乱人不安。武臣積悪之餘。果天誅下誅其先兆非無賢愚共所世知也。王事無監撰門假使雖為出塵之徒此時奈何無盡報国之忠早翻武家合體之前非。亘専朝庭扶危之忠膽矣僉議しられば三千一同ふ最之と同じて院之谷之帰り則ち武家追討の企の外無他事。山門已に来廿八日六波羅に可寄に定られば。末寺末社の輩ハ不及申所縁に随て近国の兵所集ふて雲霞の如くに。廿七日大宮の前りて着到を付るに十万六千余騎と注一る。大衆の習ひ。大早無極所存あれば此勢京寄さんに。六波羅より一揆りしたまはゞ。闕落にぞせんずらんと思ひ侮て。八幡山崎の御方にも不牒合して。廿八日卯の刻に法勝寺に勢撰あるべと觸られければ。心得ぬりと云今路より下山。或ハ西坂ようぞ折下る。中に余に急られて物具をもせず。兵粮をも未つゝきぞ山を下るも多ゝり。西六波羅聞之思ふに山徒繼ひ大勢とのゝしり騎馬の兵一人も不可有然ども此方ハ馬上の兵を以て三条河原に待受懸合せ懸用き

て悩さび山徒心武しとゝのへども重鎧に肩を被引歩立に足を痛め片時の間
疲るべし。其時弓千妻千に着て追物射に射さんぐるべし。奈何ぞ勝利を得
ざるべき是以砕大以弱拉剛術也とて七千余騎と七手に分三条河原の東西
に陣を取てぞ待うけさる。山門の大衆は斯るべしとは思ひもよらぬ我前に京へ
入て鉦らん宿をも取財宝をも管領せんと志て。宿札共を面々に二三十づゝ持せ
て法勝寺へぞ集りける。其勢今路西坂古塔下八瀬藪里下松赤山口に支へて前
陣已に法勝寺真如堂に附とゝのへども。後陣は未だ山上坂本に充満さず。朝日の
映たる甲冑は電光の激るに不異山風に靡く旌旗は龍蛇の動くに相似たり。
山上と洛中との勢の多少を見合たるに。武家の勢は十旦て其一にも不及実も
此勢にては輙しくも。六波羅を直正たる山法師の心の程。大様たるも理と
ぞ思はれける。太程に先陣の大衆且く法勝寺に付て後陣の勢を待る処へ六
波羅勢七千余騎三方より押寄て鬨を咄と作る。大衆これに驚きて。物具よ
太刀に長刀よと鬨て取物も不取敢二千人計法勝寺の西門の前に出合。近付
敵に接て懸る。武士は兼て巧さる事なれば。山徒の懸る時はむらと引。山徒弟れば
開き合せて後へ懸廻る。如是六七度かけ悩まし給へば案の如く。山徒は皆歩立乃
上重鎧に肩を被推て次第に疲たる體にぞ見えさせける。武士は是に利を得
て射手を撰へ差攻引攻射させられば大衆は是に辟易平場の戦ひ叶はじとや
思ひけん。法勝寺を指て引籠らんとあるる処に。丹波国の住人佐治孫五郎と云
る兵早西門の前に馬を横さに行先に立塞り。其頃曽て有りける。五尺三寸の
太刀を以て。山徒三人不懸付切て。太刀の少し仰さるを門の柱に当て推直。猶
も歯を相待て西頭に馬をぞ扣へさせる。山徒是に膽を冷し肝を消。又法勝寺へも歯入
替りさせじや思ひけん。門へも不入得寺の前を北へ走り。真如堂の前と神楽岡の
後を二つに分れて混さに山上差て北上る。又後陣の大衆も同様に敗北し戦場
軍場をば不見して道より山門へ引返さんと見苦しきる事共あり。麦木東塔

の南谷善智房の門宿に豪鑒豪仙と云て三塔名誉の悪僧あり。味方の大勢に引立らるゝて不心北白川を指て引々くぶ。豪鑒豪仙と呼留て申々くゝ軍の習ひとして。勝も負るも時の運によるべきなれば。恥とて不恥雖然今日の合戦の勇壮何如しても。山門の恥辱天下の嘲哢さぞ。御辺と相共に返し合せて開死し。二人が命をすくて三塔敗軍の恥を雪めんと憤りゝれば。豪仙さらや及ぶ者廃幾もる所多くとて。二人踏留て法勝寺の北の門に並び大音声を揚て名乗々くゝ。是程に引立さる大勢の中よく。二人返し合せを以て。三塔一の剛の者と云可知と宣て其名八閑及びぬる。東塔の南谷善智房の門宿に豪鑒豪仙と云て一山に名を被知さる者なるぞ。我と思ん武士あらば。よれやお物て自余の輩に見物させよと云侭に。四尺余の大薙刀水車の如くふ廻て。さうゝる。是を打取んと六波羅の大勢二人を中に取込れば。豪鑒豪仙長刀を伸て跳り懸り。近付武士の馬の足を薙倒し。冑の鉢を打破て火花を散し。悪戦さらぬ半時計。去ども続く大衆一人もなく敵まくと其勇に怖て不近付。遠矢に懸て雨の降如くに射立られば。差も二人もの十余ヶ所の疵を蒙りぬ。今八所存是迄ぞ。いざや冥途へ門道せんと云侭に。鎧御捨押裸脱腹十文字に掻切て伏。拉に伏さるゝ。是を見る敵の輩通日本一の剛の者共哉と惜まぬ者もなかりけり。去ば如形見苦さ敗軍の中に踏止まり。二人ぶ行跡佛門の学業にはぶ山門汚名の恥辱を雪ぎ都に名をぞ残しけ。

園心三責六波羅　島津射術闘四雄

去月十二日赤松山峙へ引退き後。武家勝に乗て其威を不落とのゝ。四海未静剰へ山門の大衆去月廿八日の敗軍を無念に思ひ。内武家に敵して大嶽に籠火を焼坂を塞ぐ勢を集めて。何も六波羅を可責と企るの旨。其聞えありければ。衆徒の心を取為に。大庄十三箇所山門へ寄進し其外宗徒の大衆に便宜の地と一二ヶ所充。祈祷の為とて被行る。依之山門の衆議心々に成て。武家に心を

島津
安藝前司
四人の勇士
田中藤九郎
同弥九郎
頓宮又次郎
道
同孫三郎と
射術を以て
闘ふ図

寄る衆徒多く出来くれば。何しか六波羅へ可寄結構は止しなる。是に附て
八幡山崎の官軍は度々の京合戦に討死多くありければ。今は其勢大半に減て再び
京中へ責入る勢もなかりける所に。義作の管家の一類其外冨田判官の一党或は
備前備中の輩。又は真嶋柏原松田得平妻麻の者共。後結として追々に馳上り
候べき。無程又一万余騎にぞ成にける。已に京都の有様を見透に。武家の軍立
も知られる上の事なれば恐るゝに不足とて三千余騎を山崎に残し。七千余騎を二
手に分て。四月三日の卯刻に又京都へ押寄せる。其一方には中院左中将定平
朝臣殿法印良忠を両大将として伊藤松田松野冨田の輩に真木葛葉辺
の溢者共を加へて其勢都合三千餘騎。伏見木幡に火を掛て鳥羽竹田より推
寄る。又一方には赤松次郎入道円心父子を始として宇野柏原佐用真嶋飽間中
山木小寺妻鹿田中上月頓宮菅家一党都合其勢三千五百余騎。河嶋住の
里に火を挙て西の七條より二手に分て寄せる。六波羅は度々の合戦に打

勝て兵皆気を挙る上。其勢三萬騎に余る。何敵已に近付と告るに。其
仰天の気色もなく。六条河原に勢汰して。兩に手分をせられる。先河野と陶山
とは五十騎を相副去月十二日の合戦も。其方角より勝られば吉例とて。法
性寺大路へ被差向。又冨樫材が一族島津小早川が両勢に。国々の兵六千余騎
を差副て八条東寺の方へ被相向。隅田高橋加治厚東糟谷土屋小笠原武田
の輩に七千余騎を相副て。西七条口へ被向。又山門今は武家に志を通ずとの聞も
又如何ある野心にか挟むにん非可油断とて。佐々木判官時信常陸前司時知長
井縫殿秀直に三千余騎を差副て。紀河原へ被向。自余の千余騎は諸方の遊軍荒
手の為に被残。六波羅に扣えさせ其日の巳の刻より。三方なから鬨時軍始て入替く責
戦ふ。寄手の騎馬の兵少して。歩立の射手多くれば。小路々々を塞ぎ鏃を調へて。
散々に射る。六波羅勢は又歩立の兵少して。弦馬の兵多くれば。懸違く欲と中
に取篭むとも。孫子が千変の謀。呉子が八陣の法を互に知られる道なれば。供に紛

圍只命の際の戦ひして更に勝負なきうち。河野陶山が代見木幡の手ふ
向ひ〳〵ぶ。敵に歩立の多きを見て。馬強き已が手勢三百騎を勝て後れ
備へ諸方の集り勢を先に立て。追つ蒐つ終日戦ひ。已に夕陽に近き頃敵
の足乃十分に疲れて来るを見済し。今朝より気力を養ひ三百余騎の新
手を卒し。鬨を双べ〳〵急さり〳〵。此手の寄手殿法印中院宮平が三千
余騎。散々に蒐立て。目をも不淄。宇治路を指て引退く。河野陶山急に
下知して三千余騎が軍を乱して跡を追せ。三千余騎が備へを堅めて其後り
続き〳〵。さて又已等両人が千勢三百余騎にて逃る敵を打捨て。竹田河原
を直違に鳥羽殿の北の門を打廻り。作道へ懸出て東寺の前なる寄手の
後を取篭むと。ぞ進みける。作道十八町が間に三並びさる。寄手是を見て
前後を被包て八叶じとや思ひけん。羅城門の西を横切に寺内を指て引
返すと。島津小早川が此所の寄手と。爰を前途と篠木を削て戦ひけるに

不慮河野陶山に差敵を被追拂て本意を失ひ無念やや思ひけん西七条の手より
加勢して花々しく一軍せんと喚て。西八条を上へ〳〵西朱雀へぞ馳せ寄りける。河野陶山
八且〳〵人馬の息を休め。我ホも彼手に向ふべしとて。跡に下つて進みける。西七条の
に赤松入道父子究竟の兵を勝〳〵三千余騎にて扣へ寄られば。厚東加賀守隅
田太郎左衛門加治源太左衛門尉。其外土屋小笠原の輩。何に責るべしとも無先右
可破様も無りける処に。嶋津小早川が二千の勢吐と喚て横合より切懸る。是
に気を得て戦ひ疲れる隅田土屋加治厚東小笠原の輩。色を直して三方より
攻合せられば。赤松が勢忽ちに閑き靡きて乱れんと仕りける。赤松田心家に
宗乃軍法を以て味方を下知し。即時に備を三手に分ち。三所ふ扣えて責戦ふ。是
に赤松が勢の中より兵四人進み出て数千騎群る敵の中へ無会釈打て入るの
勢ひ決然〳〵と。恰も項羽樊噲の愈れる如くに見えければ。京勢是に目を驚
三方へ颯と引退く。四人の中にも真先に進む男身の丈七尺計なる。髭両方一生

分も昔逆に裂さるが。鎧の上に鎧を重ね大き拳の臑當に膝鎧を懸て誠頭の
を猪頸に着成。五尺餘の太刀を帯。八尺餘の金棒を手本二尺ばかり
圓めて誠に軽気に提げたり。二方の敵を指招き大音声を揚て名乗かろ
我等四人が抑其者とあらば。備中の国の住人頭宮又次郎入道日子息孫
三郎田中藤九郎。同舎弟弥九郎と云者之父子兄弟四人其昔勅勘武敵の身と
成て同山賊を業として一生を楽むとも。然るに今幸ひに此乱出来て。忝くも万
乗の君の御方に参向せば。去べ先度の戦ひに指さる軍もせで。味方の負と成た
る事。我等が恥と存る間。今日に於ては緩ひ御方負て引とも引まじ敵強く
とも其まもるほど。其中を破て通り是非六波羅殿に真に對面可申と斯云ば
則田中藤九郎盛兼あり。我と思ん人はよりあせよと。飽すがに廣き吐て二王立
つぞ立たりける。島津安藝前司氏久是を聞て。二人の子を密に招き彼等が中
国一の大力と云日頃に聞及ぶ所なり。今彼等を討んと大勢にて悪うもあん我が

父子三人相近附て進とつ退とつ。且く悩て其透を見て討んに。あぐら是を討ざ
む狼ひ力も強とも。身に矢の立め事あるべ。緩ひ走ると早くとも歩
立られば。馬にあるとも追付まじ。多年誓古の大至愛。今の用に不立べ。毎々に期
べき。將々不思議の一匪て人に見せんと云侭に父子三人打ぬけて四人の敵に相近
付。田中藤九郎是を見て大勢の中より秡出て進とつ。其名はいまだ知ぬども
猛くも思る志哉。同じくは御辺達を生捕。御方と成て軍させんと嘲矢絆
の金棒打振て雨に進めば安藝前司が二人の子太刀拔かざて打て懸り請
つ兩つ戦ふ間に。安藝前司弓矢を手挟み馬を静々と歩ませ。矢頃に成と覚
くまば。三人張に十二束三伏目に堅めて丁ど放つ。其矢あやまらず田中が右の脇
前を。甲の菱縫の板に掛て箆中計ぞ射通しける。急所の痛手に差その大
力。眼くらくして進不得。舎弟弥九郎盛恭走り寄て其箭を拔捨。君の御敵は六波
羅の時益仲時なり。兄の敵は御辺なり。遁をまじと云侭に。兄盛兼が金棒を振

お振て懸りくれば。頭宮父子も各五尺二寸の太刀引側めて。ばらく跡に続いさう。島津ハえより物別くる馬上の達者。矢継早の手利なれば。少も不騒進んで懸る盛無く。間の鞭を打て押並に將と射る。弦音を心得く田中ハ身を側めて妻手へ廻れば。島津ハ弓手を越て丁ど射る。中国名誉のお物の上手と北国無双の馬上の達者と。射立お立懸達へ人交もせず戦ひくるハ前代未聞の見物と去程に島津が矢種已に尽て。打物の勝負と見えくれば。六波羅の大勢迫も打物業にて。島津危〳〵と思ひくれば皆抜連て切〳〵急る。田中兄弟頭宮父子大勢の中へ蒐入て。左に當り右に通り前を拂ひ後を討て。遂に八方へお散と。朱雀の地蔵堂の北ホ和へさる。小早川が二百余騎其勇力の程を見く。翁先に懸ずと云ば。四人の勇士を的に成て散々に射立くれば可哀四人の勇士鎧の透間内塊に各矢一三十筋射立られて太刀を逆に突立て。皆立疲に死くるる。是を見る者きく者無慙なり。赤松の者ども。斯る勇者を不助して。目の前に討せて。實に以て不覚なりとて。後々までも此事を歎息せぬハ無てなり

有元一族闘死洛陽　長宗一騎頭勇力

此時義作の住人菅家の一族。有元四郎佐弘。同五郎佐光。又三郎佐吉福光彦次郎佐長道。月彦五郎重佐。原田彦三郎佐秀。鷹取彦九郎種佐。三百余騎にて四条猪熊まで責入。武田兵庫助高橋判官糟谷三郎が一千余騎と懸合せ時移るまで戦ひくるが。跡あの御方の不続くして引退く體を見とのがるる。元来引ぐるとや思ひくん。又向ふ敵に後を見せぐるとや恥くるむ。被討残さる味方を下知く。近付敵に弛双べ引組ぐる馬より落。上に成下ふかり互に勝負を爭ひくる。四郎佐弘ハ今朝よりの軍に脇口を被切て。力や弱りくるくん。武田七郎に押へられて首を被掻くれば。弟の五郎佐光ハ武田次郎を組伏首を取て立上る。又其弟又三郎佐吉ハ武田が良等と差違へて死くるる。敵二人も兄弟御方二人も兄弟なれば。死残りくる敵味方の兄弟いざや俱に勝負と決せんとて五郎

妻鹿孫三郎長宗
一騎の若武者を提げ
追来る敵の中へ
投る小馬武者
六騎と投越して
深田の中へ
打込図

佐光と武田七郎と持たる首を双方とも投捨て又引組で指違ふ是も続いて福光殖月原田鷹取同時に馬を並べむずと組でも動と落こ組でも指違宗徒の輩廿七人一所にて討死せしよう此陣の軍も破れしぬ高橋武田糟谷の輩兵を引具西七条へと馳向ふ依之諸手の京勢八方より赤松父子を追取圍む余さ物と操ぶしぬ差もの赤松父子散々に乱され山嵜を引返を美に播州国の住人妻鹿孫三郎長宗と云者あり薩摩氏長ぶ来て力人に勝れ益重世ふ起こり生年十二の春の頃より好で相撲を取ること日本六十余州の中に敵なし片手にも懸る者いなかりけり人の類を以て聚る習ひなれば相伴ふ一族十七人皆是尋常の人にも起こりけり去ば此日他人の手を不交して一陣に進む六条坊門大宮まで責入ぶ東寺竹田より勝軍に立帰る六波羅の勢三千余騎に被取巻従横無尽に独立て死力を究て戦ひけるぶ敵は大勢なり味方は僅の小勢なり其上今朝よりの責合に戦ひ疲上あれば一族十七人悉く被討て長宗一人ぞ残りける生て無甲斐命あれども君の御大事是に限る人々一人あるも生残りて後の御用にと思ひ定め拘て族に敵を左右へ打離け一条の血路を開て只一騎西朱雀を指て引ける印具駿河守の軍勢五十余騎跡を慕て追かけける其中に年の程二十計なる若武者一騎先に進む長宗に組んと馳寄て鎧の袖に取着ければ長宗是を物ともせず長肘を指延て彼若武者の鎧の角總を掴で中に提げ馬を開に歩ませて三町計ぞ行ける此若武者然るべき者にてや有けん他討もるとて五十余騎の兵跡に付て追来りけると長宗尻目に見おろして眤で敵も敵に成ぬるぞ一騎なれども我に近付くあやまちすな欲しくば是取せんと破請取と云侘に左の手に提げける鎧武者を右の手に取渡し曳と声して抛ける敵の武者六騎ぶ上を投越て深田の泥の中へ見えぬ程にぞ打込ける此手並に舌を巻て五十余騎の者共同時に馬を引返し逸足を出してぞ逃ける長宗は左もあらんと拘咲して閑と引

敗亡されば赤松ハ路次にて敗軍を聚め手負討死を點檢するに殊更今日の軍にハ憑切なる一族の兵所々にて八百余人討れ亡られた。入道大に力を落し気疲き心緩うて無詮方又八幡山寄へ曳取る

○按ずるに高時亡びる後年北面の輩徒然の余り妻麻孫三郎が事を語る。後日君の御用に立んと思ひて退きぬ。又命を惜で退ぬる両条雖難ありられば則祐其危に在て。いやとよ彼が所存朝昏感ぜるて多く侍りと申されば。正成勿論の事危もありぬ。人の義に當る行跡を任さんに。殿原達の口に任せて宜ん。何ぞ可善申。其時長宗億して通れるとふとも。以前に臆しぬる事あるして。後日又君の御用にも立ぬと謂て。其場に死せざ身忠あり。彼命を捨ずして事を後日の君に寄て。死を通れるとい彼男の心中誰か知るふ。彼臆さば。其雖義ある場に臨で其語ハ出間敷ハ。其上力ハ強し意ハ剛なれば後日君の御用に立間じきを兵にも不待以前に不覚あり。何を以て命を惜こたりと疑ひて。各危ハ宜ふらん但彼に主ありて其主の死する所をどうして危様の事を云て通れるんハ非人倫と被申されば一座の諸将皆信服せりとぞ。惜哉長宗の行跡此軍に東寺門前の軍而已にて其後を詳にせず

先帝自修金輪法　忠顕領衆戰帝城

京都數箇度の合戦に。官軍毎度打負て。八幡山崎の陣も已に小勢に成ぬと聞えられば。先帝天下の安危如何有らんと宸襟を被悩。舟上の皇居に壇を被立。天子自ら金輪の法を行ひ給ふ。其七ヶ日に當りける夜三光天子光を並べて。壇上に現じ給ひられば。御願忽ち成就しぬと憑しく被思召る。去ば態て大将を差上せて赤松入道に力を合せ。六波羅を可攻とて。六條少将忠顕朝臣を頭中将に成。山陽山陰西道の兵の大将にして。京都へ被差向其勢伯耆国を三

まで僅に千餘騎と聞えが。因幡出雲返作但馬丹波丹後若狭の勢共馳加て程なく二十万七千余騎に成にけり。爰に第六の若宮恒良親王が元弘の亡霊始め武家に被因させうひて但馬の国へ被流させうひしを其國の守護太田三郎左衛門尉取立奉て近国の勢を相催し。後驍に丹波の篠村にて頭中将に参會せ。忠顕朝臣不斜悦て即ち錦の御旗を立て。此宮を上将軍と仰ぎ奉て。尚軍勢催促の令旨を被成下ケり。四月二日宮篠村を御立あるに。西山の峯の堂を御陣に被召相従ふ軍勢二十万騎。谷堂兼室衣笠方石大路松尾桂里に居余りて手八野宿に充満ケり。此時殿法印良忠八幡より陣を取。赤松入道円心八山崎に也を弘れば頭中将の陣と八幡山崎の陣と相去て凡五十余町計なれば。方々牒ど合せてぞ。京都へ可被寄事あるに。頭中将我勢の多きを被憑ん。又猶の高名にせんとや被思ん。彼等の陣ぶを不知して。潛に日を定て四月八日の卯の刻。六波羅へ可寄旨諸軍勢に下知せ

きりにけよ皆眉を皺めて。阿那不甚哉今日八佛生日にて心あるもこころざしも灌佛の水に心を澄し供花焼香に経を翻して。捨悪修善を事とする習なるに。時日にて多くに。齋日に合戦を始て天魔波旬の道を被学条雖心得されば此度の軍もてのほかなりけり

○評に曰凡良将八天官時日を不用とあん。其故八味方吉日を撰で出れば敵の為にも又吉日なり。去ば武王八甲子を以て勝紂王八甲子を以て亡ぶ是意を源廷尉義経の軍歌に

去りとも味方よくれば敵もよし唯万要々方角をとゝ

かくハよるあり然もでも或に盲昧の士卒を勇ましめんが為に偶日と撰幸あり。是愚を使ふ一助あればあり。故に正成も表八用ひて裏八不用と被申とにや。忠顕朝臣此意を知て此日を被用しや。覚束なき已ふ遵生八戒に玄樞経を引て曰く二月初八日乃千佛生日也と。周の世の八子の

月を以て歳首とす。故に昭王九年四月初八日釈迦西天に生るゝとゝ
今の二月に始皇改て寅の月を以て歳首とす。故に今の四月八周の世
の六月に。然れば此日を以て軍に用る事可忌事あるべきまでも歳首乃
建支の違より。今の四月八日を佛生日と謬り来る事久しくれば。愚言の
士卒の忌思へる其日を以て。軍を定め被申事。忠頭朝臣軍法に疎き所
なりと知るべし

扨敵御方の軍勢。源平互に交りぬれば。無主身にて何士おも有ぬべしとて。白
絹を一尺ゞ切て瓜と云文字を書て。鎧の袖にぞ付させ給ひける。是は孔子の言に
君子の徳は瓜也。小人の徳は草也。草に瓜を加ふる時は不偃と云事あるとゝ。
ある〻〻。六波羅は此度の敵を西に見ゞ故に。三條より九條まで大宮面に屏を塗。
櫓を掻て射手を備へ。小路〻〻に兵を千騎二千騎扣へさせて。美麗に進こ鶴翼
圍む撓をぞ謀りける。寄手の大将は誰ぞと問に。前帝第六の若宮副将軍宗種
頭中将忠頭朝臣と聞えけれぬ。扨も軍の成敗心懸るべき源も同じ流れ也とゝ
ど。江南の橋は江北に被移て枳と成習ひあり。弓馬の道を守る武家の輩と。
瓜月の才を事とする朝庭の臣と。戦ひを決せんに武家不勝と云事不可有と。
各勇に進んで七千余騎。大宮面に打出て。寄手遅〻とぞ待懸る。去程に忠
頭朝臣神祇官の前に扣へて兵を下知し。上は大舎人より下は七条まで小路毎
に千余騎づゝ指向て雑中を責被申ける。武士は要害を構て射手を面り
に馬武者を後に立て散々に射させ。敵の疲む所を見て。懸出〻〻追ける。官
軍は二重三重に新手を立られば一陣引ば二陣入替り二陣退けば三陣進こ人馬
に息を継せ。煙塵天を掠て責戦ふ。官軍も武士も互に義に依て命を軽んじ
名を惜て死を爭ひ。御方を助けて進むあれども。敵を遇て退く人無りけり。
角てや何可有勝負とも見えざりける處に。冊波但馬の勢の中より勇て
京中へ細作者を入置ける。時分を見澄て此彼に火を懸ける。時節辻風烈く

吹て。揺煙後ヨ立覆ひ給れば一陣ニ備へ給る武士脉々として大宮面を引退き。雑中ハ
踏止まりて附入敵を支へ給ふ。六波羅の両将是を聞て。味方弱々む方へ可向とて。
残し置給る佐々木時信隅田高橋南部下山河野陶山冨樫小早川等ハ五千
余騎を差副て一条二条の口へ彼向給れば。此荒手ニ懸合て但馬の守護太田三
良左ヱ門二条口ニて彼討ニ給ふ。丹波国の住人荻野彦六足立三良ハ五百余騎ハ
て四条油小路まで責入て。備前国の住人蓮師寺八郎中吉十郎丹兒玉ハ勢七
百余騎と戦ひ給ふ。二条口の寄手既ニ破れぬと聞え給れば是ニ気おくれて。手
の勢散々ニ乱れ立て引退く。金持三郎ハ七百余騎ニて。七条東洞院まで責
寄給ふ。深手を負て引兼給ふを。播磨の国の住人肥塚ハ一族三百余騎ハ中
ニ取籠出抜て遂ニ虜給ふ。丹波国神池の衆徒ハ八十余騎ニて五条西洞院
の責口ニ進み御方の引を待て戦ひ給ふ。備中国の住人庄の三郎真壁の
四郎三百余騎ニて取籠ニ人も不余討て給ふ。如斯諸方の寄手。或ひハ彼討又ハ
彼破て。皆桂川の辺まで引給れども。名和小太郎長年と児島三郎高徳ハ向ひ
給ふ。一条の寄手ハ未引懸つ返しの時移るまで戦ふ。防ぐハ陶山と河野まで。
責給ふ名和と児島也。児島と河野ハ一族ニて。名和と陶山ハ知人なり。日頃の詞
をや恥さらん。後日の雑をや思ひ給ん。死て戸ハ曝とも逃て名を失ハじと。互ひニ
義を面ニして。命を不惜喚き叫で責合給ふ。大将頭中将ハ内野と彼引けり。
一条の手尚相挑で戦ひ半ばと聞え給れば又神祇官の前へ引返し。使を立て名
和児島を彼召返給ふ。名和児島此使を受て。陶山河野ニ打向ひ今日已ふ
日暮ひぬ。後日ニこそ又見参ニ入ん。あと。色代して両陣互ニ引分れて。各東
西へ去ニ給ふ

忠顕遽退西山陣　京勢焼雑西霊刹

夕陽ニ及ぶ軍散じ給れば。千種頭中将本陣峯堂ニ帰て。御方の手負討
死を彼註給ふニ七千余人なり其内宗と憑る太田金持の一族以下数百人

兒島備後三郎高德
千種忠顯の憶病ゑ
西山の陣と沒落
せろ〳〵と
怒る圖
陣
千種忠

被討畢ぬ。仍て頭中将心少〻臆し被申くゝむ。児島高徳と召寄て敗軍の士
力疲れて再び雑戦都近き陣ハ悪うぬと覚ゆ。必境を阻て陣を取尚近
国の勢を催促し。重て都を責やと思ふ如何ゝと被申くれば。高徳不聞敢
軍の勝負ハ時の運ゝ寄事ゝてひへた。負ぬ事とて必ずも不恥。唯引間ぬる処を
引可懸所を不無と大将の不覚と云申す。其故如何ゝ。あれば赤松入道ハ僅ゝ十
余騎の勢を以て。三箇度京都まで責入不叶時ハ引退きて。遂ゝ八幡山崎の
陣をば不去ひ。御勢後ひ已半被討てひとも。残る所の兵尚六波羅の勢ゝうハ
多くなるべし。此御陣後ハ深山ゝて前ハ大河也。敵若寄来らば好む所の砦なり。
況賢此御陣を引んと思ふ事不可然ひ。但し御方の疲れる弊ゝ乗て。敵夜
討ゝ寄る事のやすんと存ぜず。御心安ゝむずゝん兵と四五百騎が程梅津法
輪の渡へ差向て警固を被為ぜ。高徳も用心のため七条の橋爪ゝ陣を取て待
候へと申置て則ち三百余騎ゝて七條の橋より西ゝ陣を堅めける。千種殿々
児島ゝ云恥あらんれて暫ハ峯堂ゝ御座ける。敵若夜討ゝや寄んずらんと云
ける言ゝ被警。弥臆病心や附ける。夜半過る程ゝ宮と御馬ゝ乗奉り
て。兼室の前を直達ゝ八幡を指てぞ被落ける。備後三郎斯事とハ不慮夜
深方ゝ峯堂を見遣ば星の如くゝ耀き見えつる篝火次第ゝ数消て所々ゝ
焼荒めり。是ハ哀ゝ大将の落給ひぬるんと怪こそ。事の様を見むとあるゝ。兼室の大
路より峯堂へ上る処ゝ。浄住寺の前ゝて萩野彦六朝忠ゝ行合ける。朝忠高徳
ゝ向ひ無云甲斐大将已ゝ今夜子の刻ゝ落させ給ひて間。諸国の集り勢も
皆思ひくゝ落失てひぬ。我等も無力丹波の方へと志て罷下りひ也。ざこせ給へ
打連申さんと云られば。高徳大ゝ念て斯臆病未練の人と大将と憑こそ
度あれ。去も直ゝ事の様を見ざるんハ後難もありぬべし。早御通りひ。高徳ハ何
様峯堂へ上て宮の御跡を見奉て。追付可申と云捨千の者共を蕭ゝ留めて。
下人一両輩を召連落行勢の中を押分〻〻峯堂へぞ上りける。大将の御座つる

本堂へ入て見まゐぞ扨も還て被落さうと覚えて錦の御旗鎧直垂まで被捨置
ぬ。餘りの事ゝ島徳瞑を立て哀れ此大将。如何ある壕崖へも落入て失ひ給
と猶言て。堂の椽ゝ歯噛をして立さりもぶ。今ハ左て手の者どもの
待かゝるらんと思ひ乱れバ錦の御旗計を巻て下人ゝ持せ急き浄住寺の前
へ走り下り。手の者打連て馬を早めゝれバ追分の宿の辺りまて荻野朝忠り
ぞ追付ける。荻野朝忠ハ丹波丹後出雲伯耆の方へ落行勢の三千余騎篠村
八幡田辺ゝ打集て有ける。相伴ひ路次の野伏を追拂ふて。高徳と倶ゝ丹波
国高山寺の城ゝ指籠て暫く時をぞ伺ひける。斯て頭中将西山の陣を落ぬと
聞えしかば。翌日四月九日京六波羅の軍勢。谷堂峯堂浄住寺已下より。松
尾万石大路兼室衣笠ゝ乱入て。佛閣神殿を打破り。僧房民屋を追捕し。
財宝を悉く運び取て後所々ゝ火を懸ければ時節魔風烈ゝ吹て。峯堂浄
住寺最福寺兼室衣笠三尊院惣して神社堂塔三百餘ヶ所。在家五千余
宇一時ゝ灰燼と成て。神體佛像經論聖教忽ちゝ寂滅の煙と立上る。抑彼
谷堂最福寺と申ハ八幡太郎義家朝臣の嫡男。對馬守義親の嫡孫延朗
上人造立の霊地なり。此聖人幼稚の昔より。武略累代の家を離れ偏ゝ寂
寞無人の室を卜ゝ戒定慧の三学を兼備して。六根清浄の功徳を得給
ひしかば。法華讀誦の窓の前ゝハ松尾の明神坐列して耳を傾け。真言秘密の
扉の中ゝハ縁角の護法手を束て奉仕しける。斯有智高行の上人神創ぜし地
砌なれば五百余歳の星霜を經て。末世澆漓の今ゝ至るまで。智水流清く。法
灯光り明らかなり。三間四面の輪蔵ゝハ。轉法輪の相を表して。七千余巻の經論を納め
奉られたり。寄樹怪石の池上ゝハ都率の内院を移して。四十九院の楼閣を並ぶ。
十二の欄干珠玉を天ゝ擎げ。五重の塔婆金銀月々を引恰も極楽浄土の七宝
莊厳の有様も角やと覚る計ゝ。又浄住寺と申ハ戒法流布の地律宗伝業
の砌也。釈尊御入滅の刻金棺未開時捷疾鬼と云悪鬼潛ゝ雙林の下ゝ近付

て卿牙と一ツ引鉄て是を取る。四衆の御弟子驚見て是を留めむと仕るひ
くくも。片時の間に四万由旬を飛越て。須弥の半四天王へ逃上る。時に佛法外護
の将軍韋駄天三千大千世界を追巡り追攻て遂に奪ひ返しつひに其後
漢土に傳り南山の道宣律師これを護持せしる。自尓以来相兼して我朝に渡
渡しを嵯峨天皇の御宇始て此寺に彼奉安置め。偉哉大聖世尊滅後二千三
百余年の以後。佛肉猶留て廣く天下に流布すると雖斯異瑞奇特の大伽藍を。各
なくして破滅されば偏に武運の可盡前表哉と。人皆唇を翻しろくに果して幾
程も非ざるに。六波羅の主従江州の番馬に亡び。北条の一類悉く鎌倉にて。失
くる事にて不思議なれ。積悪之家には必有餘殃とは。加様の事を可申と思ハ
ぬ人も無ざりし

南北太平記圖會巻之八

本佳